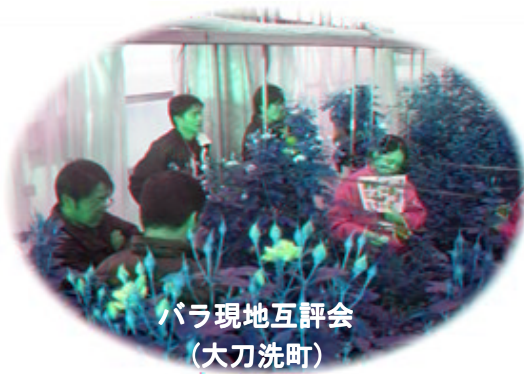


平成23年度 普及活動成果集



福岡県久留米普及指導センター

平成24年3月

はじめに

23

6 11

23

24 3

1 新規就農者を応援

1 背景

管内の新規就農者数は毎年 25 人前後であり、県下の新規就農者数の約 1/4 を占める。その殆どが農家子弟の新規学卒及びUターンであるが、農業教育を受けずに就農する者が増加している。また、普及指導センターの生産部門の技術支援対象は J A 生産部会員が主体であり、新規就農者の技術習得先は多くが親や近隣農家となっている。

このような新規就農者を対象に調査したところ、土づくりや作物の生理生態等の基礎知識の習得が必要であることがわかった。

そこで、新規就農者等が基礎知識を学び、実践力の向上に活かすことを目指し、「新規就農者基礎講座」を実施した。

2 活動内容

対象は、就農 3 年目までの新規就農者及び 4 H クラブ員等とした。カリキュラムの内容は大きく「土づくり」「作物の生理」「病虫害防除」とし、講義・実習方式で実施した。

なお、対象者への周知は市町、農業協同組合と連携して行った。

また、現地視察では露地野菜、施設野菜及び果樹経営の指導農業士の先進的経営を学んだ。

表 1 新規就農者基礎講座カリキュラム一覧

	日 程	カリキュラム	内 容
第 1 回	5 月 24 日	新規就農者のつどい	普及センターの紹介及び見学、4Hクラブの活動紹介、土壌サンプルの採取方法
第 2 回	7 月 5 日	土づくり、肥培管理の基礎	土壌分析 (pH、EC) 及び pH 調整
第 3 回	7 月 12 日	土づくり、肥培管理の基礎	肥料吸収のしくみ、肥料の種類、施肥設計
第 4 回	8 月 16 日	病虫害防除の基礎	病虫害の種類と発生及びその防除方法
第 5 回	8 月 23 日	病虫害防除の基礎	農薬の種類と特性、効果的な防除方法
第 6 回	9 月 6 日	現地視察	先輩農家のほ場を見学し、勘どころを学ぶ (露地野菜、施設野菜、果樹)
第 7 回	11 月 8 日	作物のしくみ	作物のライフサイクル (発芽、成長、開花、結実等) 管理作業との関わり
第 8 回	11 月 22 日	作物のしくみ	光合成のしくみ、光が作物に与える影響及び光を調節の管理作業や被覆資材
第 9 回	12 月 13 日	意見実績発表 グループワーク	ライフプランを作成し、農業経営の目標と5年後の姿を明確にする
第 10 回	12 月 27 日	作物のしくみ	水管理 (土の水分) と根の働き

3 主な成果

- (1) 講座内容に対する理解度は66%であり、基礎知識の習得については一定の成果があった。
- (2) 受講者は、土壌分析、施肥量の計算及び管理作業と生育ステージの比較表作成等の実習に取り組むことで、基礎知識の習得が実践力の向上に繋がることがイメージできた。
- (3) 現地視察を行うことにより、新規就農者の身近な相談相手である指導農業士との繋がりを作る事ができた。また、新たな栽培方法への取組やリスク管理に対する具体的な取組だけでなく、「自分の農業」をPRすることの必要性を学ぶことができた。
- (4) 新規就農者が基礎講座に出席することで、継続的に普及指導センターに来庁し、栽培技術等の質問をする機会が増えた。



講義（土づくり、肥培管理の基礎）



現地視察



実習（土壌分析）



現地視察

4 今後の課題

- (1) 受講しやすいカリキュラムの設定
- (2) 経営管理能力向上に向けた講座の充実
- (3) 講座により習得した技術の実践と経営計画への反映

(地域振興課 地域係)

2 水田農業担い手組織のステップアップ

1 背景

19 4

20

20

40%

100%

2 活動内容

21 23

103

11



地域担い手部会



法人化推進の集落座談会

()

H23

3 主な成果



担い手連絡協議会研修会

	H20 (A)		H23 (B)	(B/A)

()
 20 11
 22
 13
 24 5
 24



担い手連絡協議会現地検討会

4 今後の課題

(地域振興課 水田農業係)

3 ラー麦（ちくしW2号）の品質向上

1 背景

2 活動内容



肥料展示ほの調査

3 主な成果

4 今後の課題



ちくし W2号（ラー麦）の成熟期



ラー麦を使った商品

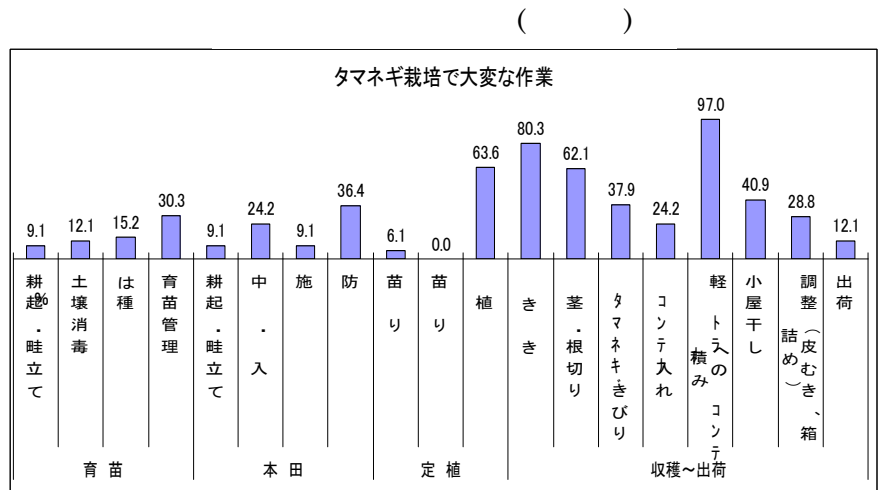
（地域振興課 水田農業係）

4 省力作業でタマネギ産地拡大

1 背景

2 活動内容

(1)



(2)



収穫機実演会



移植機の導入

(3)

3 主な成果

		H17	H20	H23
()		107	100	98
(ha)		15	15	18
	(ha)		0.3	2.71

4 今後の課題

(1)

(2)

(野菜花き課 野菜第一係)

5 「あまおう」産地の維持強化

1 背景

2 活動内容

(1)

(2)

3 主な成果

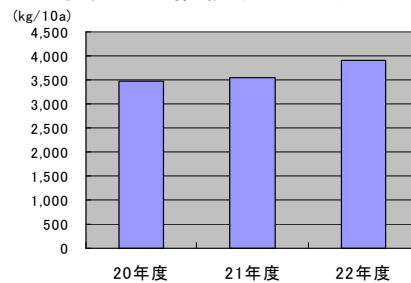
(1)



展葉速度調査

(2)

管内平均単収の推移(10a 当り収量)



技術確立実証ほ(かん水試験)

4 今後の課題

(1)

(2)

(野菜花き課 野菜第二係)

6 栽培システム導入によるトマト産地の活性化

1 背景

JA

42

21

12.9ha

JAにじトマト部会栽培システムの概要

()							t/10a
(25)		10	12	6	12 14	48	
(18)	10		9	7	26 27	H	
(4)			9	7	23 24	H18, 23	

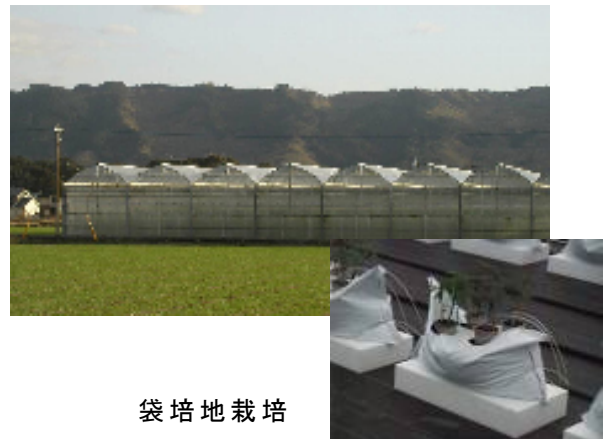
2 活動内容

- (1)
- (2)
- (3)
- (4)

3 主な成果

- (1)
- (2)
- (3)
- (4)

H



袋培地栽培

4 今後の課題

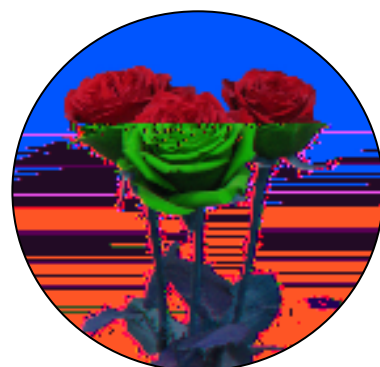
- (1)
- (2)

(野菜花き課 野菜第二係)

7 省エネ・低コストによる売れるバラづくり

1 背景

久留米管内のバラの作付面積は3.3haで県内作付面積の14%を占める。バラはハウス内の夜間設定温度が他の品目と比較して高く、肥料、燃料単価の高騰により、収益性が低くなっている。また、市場からは、夏季の安定出荷を含めた周年出荷が求められている。そこで、バラにおける低コスト・省エネ技術による周年出荷をめざすことで、出荷量の増加を図り、産地強化を支援した。



2 活動内容

- (1) 省エネの観点からも夜間設定を18℃以上にできるよう、ヒートポンプについて、導入費用やランニングコスト及び経営収支の試算などにより検討を行った。
- (2) 肥料代を節減するために単肥配合の研修会を開催した。それ以降は、定期的に原水、給液、マット内の養液などを分析し、単肥配合や施用量の調整を行った。
- (3) 単位面積当たりの出荷量や販売金額が劣る品種を明らかにした。栽培改善や販売対策を講じても、収益性が悪い品種は淘汰した。定期的に各市場との意見交換を行い、市場性も考慮した。

3 主な成果

- (1) ヒートポンプの有効活用、施肥改善、品種構成の見直しにより、単位面積当たりの出荷量は、H21年226本/坪であったが、H23年は266本/坪(117%)まで増加した。販売金額も増加し、経済状況の影響を受けにくい強い産地となった。
- (2) ヒートポンプの導入により、光熱費が約30万円/10aの軽減となった。導入経費は、5年以内に償還できる見込みである。

4 今後の課題

マーケティング調査を行い、経営を維持するための産地活動の方向性の検討。



研修会風景（単肥配合、花き流通について）



養液分析結果を基に栽培指導

（野菜花き課 花き係）

8 新たな需要を開拓する花木の新品種育成

1 背景

久留米市は全国有数の花木・鉢物生産地であるが、需要の減少、単価の低迷など多くの問題を抱えている。そこで、花木・鉢物産地の活性化を図るため、育種活動への支援を行い、新品種の育成を進めた。

2 活動内容

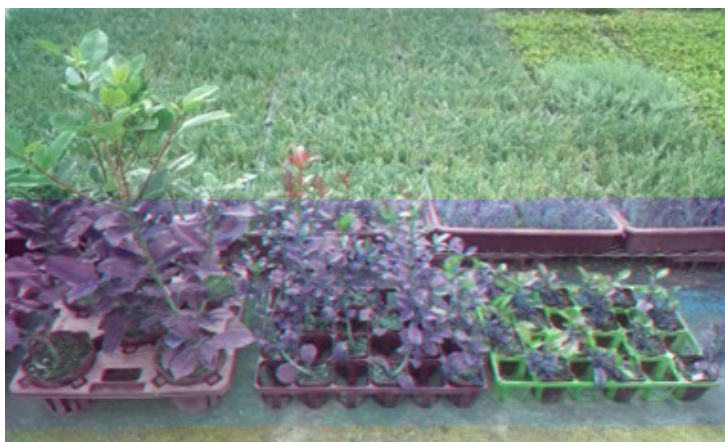
- (1) 育種研究グループ、W. W. A. (Wind of West Association、西風会) のカナメブランチ、同アジサイブランチ、久留米鉢花研究会の育種活動の支援を行った。
- (2) 各組織に対して、育種の基礎知識や交配手法、選抜方法等について講義や勉強会を行うとともに、交配、選抜等の現地検討会を実施した。
- (3) 育成した品種については品種登録申請支援を行うとともにパンフレットを作成した。

3 主な成果

- (1) カナメモチでは、これまでの品種と異なる特徴を持ち、新たな需要を提案できる3品種を育成した。樹勢が強く、新葉が青い「青カナメ」、葉が小ぶりで丸葉の「丸葉カナメ」、矮性でコンパクトな樹姿の「プチカナメ」の品種登録申請を行った。これらの3品種は福岡県新品種審査会に出品し、新品種パンフレットを作成した。
- (2) アジサイでは新たな花色の品種育成を目指して種間交雑による育種に取り組んだ。通常の交配では種子ができないため、胚珠培養を行い、交雑種7系統を作出した。
- (3) ツバキでは新たな花形の品種育成を目指して、日本在来種にベトナム原生種を交配し、交配種5系統を作出した。

4 今後の課題

- (1) カナメモチ育成品種のPRおよび販売
- (2) アジサイ、ツバキの新品種育成



育成したカナメモチ3品種
「青カナメ」「丸葉カナメ」「プチカナメ」



胚珠培養に挑戦

(野菜花き課 花き係)

花き・花木の商品 PR による産地活性化

1 背景

花き・花木生産者は、需要の減少および単価低迷などにより、販路拡大が困難になっている。しかし、販売戦略が少なく、有利販売が十分に行えていないのが現状である。そこで、花き・花木産地の強化を図るため、各 J A 花き部会等の運営支援および情報発信による販売促進活動を支援した。

2 活動内容

- (1) J A みい鉢物部会、J A みい切花部会の産地情報冊子の作成、および J A みいガーベラ部会、J A にじ花部会（カーネーション部会・バラ部会・球根部会）および久留米つばき研究会の産地ポスター等の作成支援を行った。
- (2) J A みい鉢物部会・J A にじ鉢物部会の展示会用商品 P O P の作成支援を行った。また、シクラメン、緑化木に関する商品 P O P の作成を支援した。
- (3) J A にじ鉢物部会に対し、展示会の開催を働きかけると共に、展示会の実施に当たって運営支援を行った。

3 主な成果

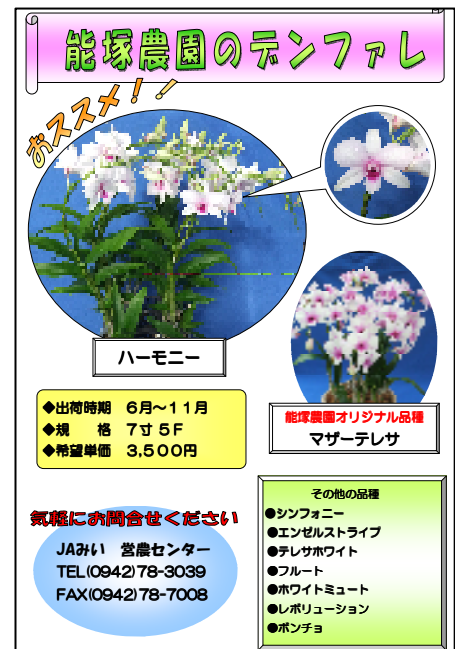
- (1) 各部会の生産・販売に関する情報および商品情報を作成、市場等へ発信したことで、部会員の販売に対する意識が向上すると共に、各品目の販売促進につながった。
- (2) J A にじ鉢物部会は、展示会を行うことで市場への商品 P R の大きなきっかけとなると共に、販売契約の拡大につながった。

4 今後の課題

- (1) 各部会等に対する販売促進に向けた提案
- (2) 販売拡大につなげる情報発信



J A にじ鉢物部会展示会の様子



商品ポップの例

(野菜花き課 花き係)

10 花き若手生産者のスキルアップ

1 背景

久留米市は全国有数の花木・鉢物生産地で、その歴史は古い。技術力の高い生産者が多いが、組織活動が少ないため、後継者世代の技術や知識の習得が進んでいない。また、個々の生産品目が異り、共通の技術習得が困難であるため、生産技術確立が効率的に行われていないのが現状である。

2 活動内容

- (1) 基本的な技術・経営等について学習する若手生産者を募り、勉強会グループを結成した。それぞれの生産者が求める学習内容について要望をとりまとめ、共通する課題や今後必要となる技術についてテーマを設け、基礎的知識勉強会や技術講習会を行なった。
- (2) 個々の農家が直面している課題をとらえて、個別にプロジェクトを設定し、展示ほを設置するなど、その解決を図るための支援を行った。

3 主な成果

- (1) 花木・緑化樹の生産者で「植木業界が今後発展するためには何が必要か」をテーマに意見交換会を開催し、産地の現状把握を行うとともに流通状況調査を行った。
- (2) 花木・緑化樹関係の生産者主体で勉強会を開催した。勉強会は他の用件が入らず、時間が確保できる早朝に開催した。22年度は経営管理、23年度は接ぎ木の技術について講義、実習を計16回行った。
- (3) 各生産者の問題点の発見に努め、それぞれの課題を解決するため、3か年で26課題のプロジェクトに取り組んだ



早朝勉強会（経営管理講座）



接ぎ木の技に注目

4 今後の課題

新たな問題の発見・課題化・解決。

（野菜花き課 花き係）

1 1 県育成品種「とよみつひめ」による産地育成

1 背景

「とよみつひめ」は福岡県で育成されたイチジクの新品種であり、全県下で普及推進が行われている。

当普及指導センターにおいても、カキや野菜の補完品目として「とよみつひめ」が導入され、産地化に向けた取り組みを行ってきた。



とよみつひめ

2 活動内容

管内 5 J A のイチジク部会、研究会員を対象に各期講習会や個別指導を行った。また、部会及び研究会代表者、J A、普及指導センターで構成するイチジク連絡協議会を設定し、全体研修会や産地毎の勉強会を開催した。

果実の安定生産のため、施設栽培の有効性を実証するための展示ほを設置した。さらに、主要病害である黒葉枯病の防除試験を農業試験場と連携して実施した。



園地互評会

3 主な成果

- (1) 平成 24 年 3 月時点で、管内の生産者は 122 戸、面積は 10.8ha まで普及が進んだ。施設化率は約 3 割まで増加し、「とよみつひめ」の安定生産に寄与している。
- (2) 販売数量は、未だ安定出荷に課題が残るものの、生産者の栽培技術の向上や施設化に伴い、毎年前年度を大幅に上回るペースで増加中である（平成 23 年度出荷実績：64.8 t、前年対比 173%）。
- (3) 黒葉枯病防除試験では、病斑の封じ込めにより感染拡大予防が可能であることが明らかとなり、対策に一定の目処が立った。



全体研修会

4 今後の課題

「とよみつひめ」導入直後は順調に拡大していた生産者数や栽培面積だったが、近年は微増にとどまっている。収穫期の降雨や病害虫による商品率低下、凍霜害等の気象災害がその要因である。今後はこれらの問題解決に向けた取り組みを関係機関と協力しながら行う。

また、生産者間で単収や所得に大きな差が生じているため、個別指導を強化し技術の高位平準化を図る。施設化は果実の安定生産に有効であるが、導入に多大なコストを生じるため、遊休施設等低コストの導入提案を行っていく必要がある。

12 カキ「秋王」元年

1 背景

県が「富有」に「太秋」を交雑して育成した種なしの完全甘ガキ「秋王」は、平成23年春から管内で高接ぎによる現地適応性試験栽培が始まった。平成24年2月にはJAにじとJAくるめのカキ部会に苗木が配布され、「秋王」栽培元年となった。



試験栽培の「秋王」

2 活動内容

秋王の導入に向けて普及センターは、次のことを実施し、本格栽培に向けて万全を期した。

(1) JAにじカキ産地構造改革計画推進大会を実施

平成23年3月に部会員に産地改革計画の説明の中で「秋王」の特性や苗木の供給計画等を説明し、推進を明言した。

(2) 苗木配布に向けて部会と入念に検討

平成24年の「秋王」苗木配布に備えて、現地試験や展示ほの設置、苗木の配布方法等について各JAのカキ部会と検討を重ねた。

(3) 栽培準備講習会の開催

平成24年1月に青年部を中心とした試作予定者に対し植え付けと管理について講習会を行い、失敗がないように万全を期した。



配布された「秋王」苗木

3 主な成果

平成23年度 管内の栽培状況

	苗木本数	展示ほ数	面積 ha
JAにじ	270	9	0.25
JAくるめ	90	2	0.07
計	360	11	0.32

平成24年2月に苗木360本、面積約0.32ha分が配布され「秋王」元年となった。

4 今後の課題

平成27年には、管内130haで栽培予定である。展示ほ11か所の栽培管理を重点的に支援する。



期待される「秋王」

(果樹畜産課 果樹係)

13 自給粗飼料の品質向上

1 背景

近年、飼料価格の変動に左右されない酪農経営を確立するために、飼料生産基盤を確保し、自給粗飼料の生産を推進することが必要とされている。

このため、乾物摂取量が確保でき、十分な生乳生産に結びつく高品質牧草の栽培、収穫、サイレージ調製の取り組みを実施した。

2 活動内容

(1) 講習会・現地検討会

酪農青年部員を中心にイタリアライグラス（冬作）の栽培管理講習会を開催し、個人毎に収量品質の改善点について目標の設定とその表明を促した。その後は、各自の目標に沿って、現地（圃場）においての助言と成果の検討を行った。

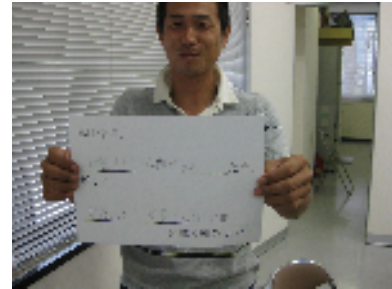
飼料イネ（夏作）については、地域単位の講習会において専用品種の導入を促した。

(2) 展示ほ設置

イタリアライグラス、飼料イネともに収穫時期に適した品種の導入を推進するために、中晩生～極晩生品種の展示ほを設置した。

(3) サイレージ共励会及び検討会

生産された自給粗飼料の品質と調製状態を確認し、酪農家全体で課題意識を共有化するためにサイレージ共励会（飼料イネ）と検討会（イタリアライグラス）を開催した。



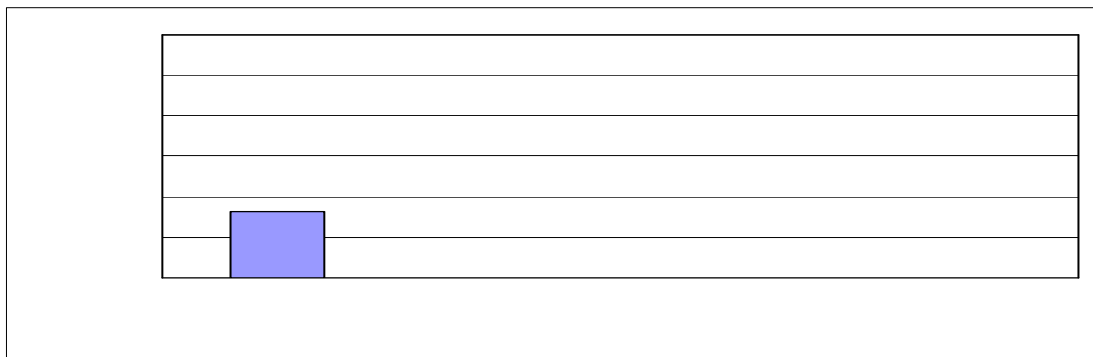
講習会（目標表明）



現地検討会

3 主な成果

品種選定と栽培に関する基本技術が習得され、自給粗飼料（イタリアライグラス・サイレージ）のTDN含量が向上した。飼料イネについては、急激な面積拡大に伴い懸念されていた刈遅れを軽減することが出来た。



4 今後の課題

- (1) 冬作における播種遅延対策の検討。
- (2) 飼料イネWC S 給与に関する支援。

（果樹畜産課 畜産係）

14 久留米地域の4Hクラブが県・九州・全国大会で活躍！

(プロジェクト発表・意見発表)

1 背景

管内には、農業青年クラブ（4Hクラブ）が6組織あり、相互の交流やプロジェクト活動を行っている。このような中で、農業青年の知識・技術の交換の場として地区、県、九州、全国段階に「青年農業者会議」があり、意見・プロジェクト発表が実施されている。

2 活動内容

日頃の4Hクラブ活動に対する支援を行う中で、プロジェクト発表は、課題の設定、試験・調査、結果取りまとめ方法等について、意見発表は、発表方法等について助言・指導を行った。

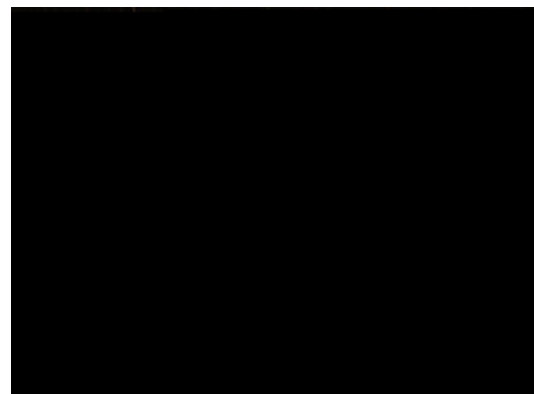
3 主な成果

- (1) 北野町4Hクラブの久保田康平さんは、「野菜の収穫調製作業の効率化」に係る課題を設定してH22年度県大会を勝ち抜き、平成23年7月21～22日開催の「九州・沖縄地区青年農業者会議」（長崎県佐世保市）において優秀賞を受賞した。また、平成24年2月28日～3月1日開催の「全国青年農業者会議」（東京都）においても発表し、同4Hクラブとしては2年連続出場となった。



優秀賞を受賞した久保田さん(中央)

- (2) 平成24年1月26日に開催された「福岡県青年農業者会議」では、プロジェクト発表の部において、北野町4Hクラブの古賀隆嗣さんが県知事賞を、田主丸町4Hクラブの田中圭介さんが優良賞を受賞した。また、意見発表の部では、久留米市4Hクラブの大石昌史さんが県知事賞に、田主丸町4Hクラブの右田英嗣さんが優良賞に輝き、久留米地域から出場した全発表者が上位を独占する快挙となった。プロジェクト発表の古賀さん、田中さん、意見発表の大石さんは、平成24年7月に熊本県で開催される「九州・沖縄地区青年農業者会議」に出場予定である。



県知事賞を受賞した古賀さん(左)と大石さん

4 今後の課題

プロジェクト発表や意見発表に対する助言、支援を通じて、経営感覚に優れた青年農業者の育成を図っていきたい。

(担い手推進班)

15 全国優良経営体表彰事業で経営局長賞を受賞！

1 背景

国や福岡県は、担い手・産地育成総合支援協議会と協力し、農業経営の改善に積極的に取り組み、地域農業の振興や活性化に寄与し、他の経営体の模範となる意欲と能力のある担い手を優良事例として表彰している。

久留米普及指導センターにおいても、優良な個人や集落営農組織等の事例を推薦しており、平成23年度は大刀洗町の白石和寿氏が「農林水産省経営局長賞」を受賞した。



全国大会での受賞の様子

2 受賞者の概要

(1) 経営概況

土地利用型（米麦大豆）と露地野菜（リーフレタス）の複合経営を行っており、水稲 6.6ha、麦 10ha、大豆 5.2ha、リーフレタス 1.5ha を作付けしている。労働力は家族3人で雇用は導入していない。

(2) 経営の特長

土地利用型作物の大規模経営に、冬場の労働時間を活用した露地野菜（リーフレタス）を組み合わせることにより、所得の向上を図っている。

米・麦・大豆は、いずれも所得の確保が見込める種子生産を行い安定した所得を確保している。

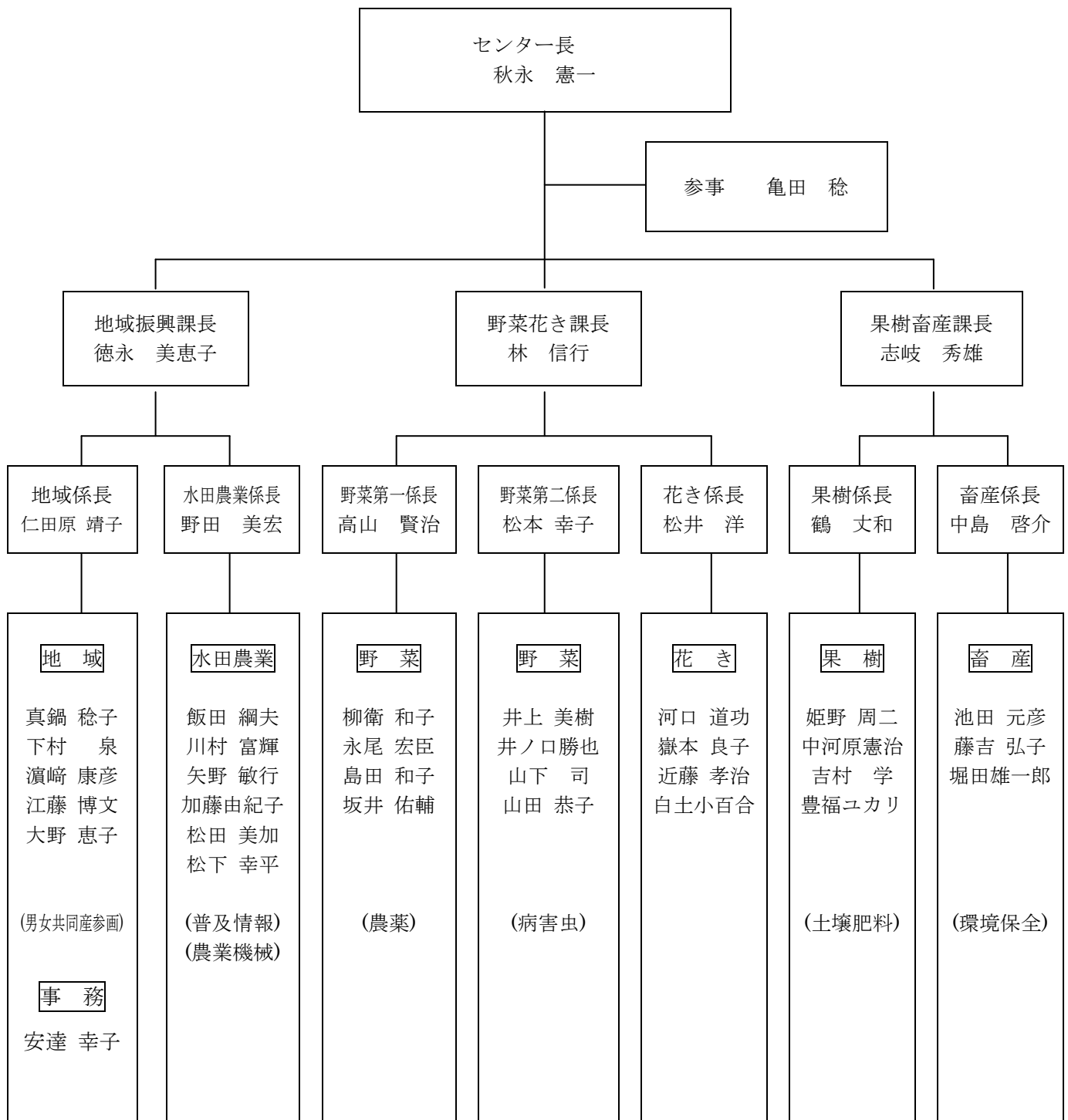
米の直売に取り組むことで、消費者ニーズに対応した販売により販売率の向上が図られ安定した経営が実現できている。

3 地域への普及性

水田農業の担い手が減少する中で、今回の事例は地域特性を生かした土地利用型農業のモデルとして活用でき、参考度が高い。

(地域振興課 水田農業係)

平成23年度 朝倉農林事務所久留米普及指導センター活動体制



注：() は、所の窓口業務

